



栗野地区 栗野町収集文書

水産業  
 漁業、地理的分布

栗野川  
 粕尾川  
 小倉川

○竹林  
 本町、竹林ハ昔時甚ダ有利ニ經營サレ賣價モ相當ニ高價ニ販賣サレ野  
 田方面ニ醬油樽、タガトシテ又新通方面ニ酒樽、タガトシテ及ハ扇傘  
 層石古屋方面へ扇、層提灯、骨傘、骨トシテ高岐阜方面へ扇、出荷  
 販賣サレ居リシガ最近野田ハ自家醬油、タメ不振、梨、桐ハ針金、進出  
 敵出現、タメ逐年不振、趨勢ヲ逆シリ  
 昭和六年産額 四五〇束

|        |        |    |      |
|--------|--------|----|------|
| 昭和五年産額 | 一四三八五俵 | 大俵 | 一〇六俵 |
| 昭和六年産額 | 一一九六一  | 小俵 | 三三〇  |

○薪炭  
 産額セニ〇〇桐多クハ本町ニテ消費サレ他町行ヘママリ移出ヲ見ス  
 C. 薪炭、産額及輸送先  
 本町、山林ハ前場、如ク可ナリ廣汎ニシテ用材林ハ多ク横根山腹及入  
 栗野ニ多ク薪炭林(瀾葉樹林)ガ大多数ヲ占ムルヲ本町、木炭産出額ハ  
 甚ダ多シ  
 出荷先ハ多ク栃木町及ビ本町ヲ經テ附近ニ消費サル  
 鹿沼町へハ約三割 出荷ス

| 名      | 場所  | 動力別機械種別 | 工人数 | 馬力数 |
|--------|-----|---------|-----|-----|
| 福田製材工場 | 栗野  | 電力      | 九   | 一〇  |
| 大串製材所  | 中栗野 | 水       | 三   | 一   |
| 齋藤製材工場 | 栗野  | 水       | 三   | 三   |
| 栗野製材工場 | 栗野  | 水       | 三   | 六   |
|        |     |         | 五   | 五   |

ル、トアリ第一的的加工終リテ後鹿沼町及栃木町ニ或ハ直ニニ横山  
 取ヨリ東武電鉄ニテ東京及他ニ搬出セラル  
 横根、植林ハ間接ニ護岸、河水量等有機的関係アリ従ツテ道路改善ハ  
 甚ダ意義アルモノナリ  
 参考ノメ、製材場所ヲ示セバ







6 針業  
 7 工業  
 工業生産比較表

分布等ヲ精査スルニ一ヶ年ノ漁量ヲ以テス曼レ正確ナ期シ難キモ知ル  
 ニ由ナキタメナリ即チ是レヲ以テスレバヤモハ口栗野ノ期及ビ粕尾  
 川(口栗野)等ニ於テ殆ンド漁獲ナシ故ニ山間部中栗野及入栗野ニ多シ  
 鮎ハ小倉川栗野川粕尾川ノ順ナリ故ニ山間部ニ入ルニ從ツテ少ナシ  
 雜魚ハ汎カ分布ス但シ小倉川ヨリ栗野川ノ方多キハ後者ハ流域多キ  
 タメナリ。鮎ハ口栗野ノ方ニ多ク棲息ス是レ水田多キタメナリ。

| 種目  | 水況   | 原料供給地    | 現況    | 出荷  | 優先 |
|-----|------|----------|-------|-----|----|
| 木製品 | 本町間部 | 生産額ニニニ〇月 | 本町及四隣 | 町村へ |    |

| 魚種 | 十二月 | 一月  | 二月  | 三月 | 四月  | 五月  | 六月 | 七月  | 八月   | 九月 | 十月 | 十一月 | 十二月 |
|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|-----|------|----|----|-----|-----|
| 鮎  | 三〇  | 四五  | 合上  | 一〇 | 一五  | 合上  | 八  | 一二  |      |    |    |     |     |
| 鰻  | 外以  | 一六〇 | 七二〇 | 合上 | 三〇  | 一三五 | 合上 | 二五  | 一〇三  |    |    |     |     |
| 魚雜 | 外以  | 五〇〇 | 三〇〇 | 合上 | 一五〇 | 三〇〇 | 合上 | 二七〇 | 五四〇  |    |    |     |     |
| 鮎  | 外以  | 五〇  | 二三五 | 合上 | 一五  | 七一  | 合上 | 二〇〇 | 一七四〇 |    |    |     |     |







商業  
 本町 一 九 四 業  
 副 五 五 業  
 計 二 四 九

商業戸數  
 栗澤一峠ヲ失業救済トシテ切リ下ゲタルハ商業上ヨリ見ルモ交通上ヨリ見ルモ甚ダ喜バシキコトナリ從來注目セザリシ南摩方面ニ極メテ微々タリト雖商業的進出ヲナシツ、アリシハ本町商業發展上誠ニ喜ブベキコトナリ

商業  
 本町ハ所謂半農半商ノ地ナレヲ以テ大都倉地、如ク商業敏活ナラズ勿論地理的ニ恵マレズ且ツ陸上交通ノ乏者ナル鐵道ノ恩恵ニモ浴ナバ、ルタメト半面ニハ又ソレダケ生活ニ安キタメトナルハ見逃ス得ザル事實テハアレ

即チ時代ノ流レニ順フ商賣ノ進出、顧客ノ応接、店舖ノ裝飾、商品ノ販路進出等ニ於テ、本町及鹿沼等ニ比較シ或ハ遜色アラシカ。

商品ノ大抵東京ヨリ物價ノ供給ヲ仰リ來リシガ近時東武電鉄ヲ利用シテ直接東京ヨリ物價ノ供給ヲ仰リ來リシガ近時東武電鉄ヲ利

商業區域ハ大ナラズ、多クハ本町及鹿沼ニ注目ニ値ス。

栗澤一峠ヲ失業救済トシテ切リ下ゲタルハ商業上ヨリ見ルモ交通上ヨリ見ルモ甚ダ喜バシキコトナリ從來注目セザリシ南摩方面ニ極メテ微々タリト雖商業的進出ヲナシツ、アリシハ本町商業發展上誠ニ喜ブベキコトナリ

|      |   |          |            |             |
|------|---|----------|------------|-------------|
| 木    | 材 | 木町山間部及鹿沼 | 生産額一八九〇五   | 本町四隣、町村及鹿沼  |
| 家    | 具 | 本町及鹿沼    | 價格ニ七〇〇〇円   | 本町及東武電鉄ニテ東  |
| 酒    |   | 本町及鹿沼    | 價格ニ二〇〇〇円   | 本町及四隣、町村    |
| 大ナ製品 |   | 本町及鹿沼    | 皆他ヨリ移入シ更   | 原料ニテ出荷別表ノ通り |
| カイロ灰 |   | 本町及鹿沼    | 生産ニ〇〇〇メ    | 大改名古ヤ方面ニ移出シ |
| 線    | 香 | 本町       | 製造戸數 三     | 更ニ第二次的加工行ハル |
| 桐加工  |   | 本町及近村    | 生産價格 一七五〇円 | 原料品ニシテ皆北押原村 |

鹿沼、皆西澤、開屋ニ集リ更ニ鹿沼中郡宮ニ運バレ第二次的加工行ハル

下駄、指物等ニ作ラレ本町内及四隣、町村ニテ消費サル







定期市  
夏季及冬季ニ市日アリ(定期市)  
夏市ハ七月十一日所請盆市ナルモ、ナリ當日ハ當町商人ハ勿論鹿沼町枋木町ノ商人遠クハ宇都宮ヨリ來ル茂呂石川土生町ヨリ干瓢ヲ賣ラントシテ集リ來タル高木近郷ノ露天商人モ交リ賑ヘリ  
當日ハ才盆ニ必帯ナル花筵ゴサヲ始メ果菜委南風其、他、呉服茶日用諸具竹細工塗物膳梳桶等小供、玩具學用品下駄委金物菓子茶婦人装身品食糧品等販賣ナル街頭商人ハ皆他町村ヨリ來ル商人ナリ  
本町日中入栗野(粕尾清沙、南摩、眞名子等ヨリ集リ來ル)

冬季定期市ヲ暮市ト称シ旧曆十二月廿六日開カル  
商業圈内ハ田盆市ニ全引取引販賣物品亦全引正月飾ニ必需品ガ盆飾必需品ト替リ夏物ト冬物トノ交替位ノ程度ナリ。

平市ハ製ナ、生産サル、毎月六、日ニ開カル製ナ中間商人ノミナリ市ナレバ從ツテ集リ來ル者ハ皆其道、玄人ノミナリ取引商品ハ製麻皮ノ等ニ限ラル

臨時市  
蕨、臨時市ニシテ蕨、大量ハ皆結城、小山、古河、下館等ニ出荷シ其、残物ナレバ取引量甚カクナシ。

如何ナル商品ガ本町ニテ消費サレルカヲ試ニホセバ(各商店ニテ實際ニ聞キシモノナリ)

| 種類   | 目     | 移入 | 移出 | 本町消費   | 備考                       |
|------|-------|----|----|--------|--------------------------|
| 織物   | 九二〇〇円 |    |    | 殆んど全部  | 枋木及鹿沼町ヨリ入ル、東京ヨリ直接入ルモアリ。  |
| 晒及染物 | 八三    |    |    | 五九五〇   | 本町製品ニシテ亦消費品ナリ            |
| 木製品  |       |    |    | 三二五    | 本町産ニシテ本町消費               |
| 穀類   |       |    |    | 一〇五七九  | 本町産ニシテ本町消費               |
| 大類   |       |    |    | 五〇〇〇円  | 仲介商人ノ手ニヨリ縣外ハ造洒家無價格五万円皆消費 |
| 酒類   |       |    |    | 二〇六〇〇円 | 本町製品                     |
| 菓子類  |       |    |    | 三〇〇〇円  | 静岡産枋木鹿沼町ヲ經テ來ル            |
| 茶類   |       |    |    | 四五〇〇   | 仙臺、東京、静岡、茨城ヨリ鹿沼町ヲ經テ來ル    |
| 魚類   |       |    |    | 二二〇〇円  | 東京市場及四隣町村ニ               |
| 木類   |       |    |    | 三七〇〇〇円 | 本町及四隣町村ニ                 |
| 漆器類  |       |    |    | 三五〇〇   |                          |
| 鉄具類  |       |    |    | 八五〇〇   | 枋木鹿沼及直接東京ヨリ移入ス           |
| 果實   |       |    |    | 三〇〇〇円  | 他縣及枋木産、枋木及鹿沼町ヨリ入ル        |
| 肥料   |       |    |    | 五〇〇〇〇円 |                          |
| 野菜   |       |    |    | 七七八六〇円 |                          |







第十一章 風俗習慣  
一人情 勤情の状況

入状は古未醇樸敦厚にして友情に篤く隣保相助の精神に富み所謂五人組なる組合の設置非ざるはな冠婚葬祭相往來し喜を分かち悲を共々するの風が有った明治十四五年の頃迄此の美風良俗が濃厚に支持せられた當時は生活も裕福で矢張り衣食足って礼節を知るの趣があつた其後西改の文明が輸入され思想の上にも生活の上にも変化を来たし同じ醇樸と云ふ中に濃淡の差昔ほど同じからず年々軽るに従つて醇樸木訥は減退するの傾向に在り是れは社会組織の变化より受たる共通性を帯ぶるものであるが僻取山村にも波及びして良風美俗を毀ちつつあるは慨ずべき事である組合制度は今も継続し將來も継承せらるべき性質のものなら思想的に急に赴て水火も辞せざる偏狭の風は明治の初期以後うすらざる事は事実である明治二十三年の頃迄は一月の内喧嘩をなすものが幾組も行はれたこれは当時の生活状態が裕福であり酔余の喧嘩や下りぬものもあるが一旦喧嘩腰になつた以上彼を刺すや斬るや非善悪は兎も角も當時は何事にも真剣になり得た氣魄をもつて居たは依自ら負ふ所のものは此等がためである社会的制度が整頓したことも鬭争の少なくなつた一の原因であり







二冠婚葬祭

1. 元服

徳川封建時代には男子は丁髷を結ぶ前髪を立て十六才に至れば其の居  
住地一流の名望家を鳥帽子親と頼み前髪を剃り士分のもは鳥帽子を  
冠らせ諱を典ふるの例であつたが農工商の子弟は士分程の厳しき式は  
ないが是れから一人前の男となる訳であつた醫師などは多く切り下で  
散髪或は総髪のもの多く此等は勿論前髪を落さぬのである是れは明治

であるが働く時には現今の人の二倍も働いた先づ農家に就て云へば晝間  
の野良仕事に充分働き夜間又規則正しく家長始め家族のものが松のひで  
燈りの下で夜業を試みた明治維新前迄はお伊勢参りする東海道五十三次  
往復の費用は夜業に繩をなつて蓄積したものが例になつて居る祖廟極度の崇  
上方見物の念の篤きを想ふべしである明治の中期迄足半太居と云ふ名実共  
に全う一家が有つた江戸に出るにも足半をけいて何等恥らふ所が無つた  
今農家に就て足半五足を求むるにも足半をけいて何等恥らふ所が無つた  
たことを証する一事例である衛生思想は進んだが体力の頑健なる莫に於  
て昔の人に及ばぬことも大いに勤惰に關係する事を思はる。

争の少なくなることには一面結構ではあるが闘争性の欠乏と同時に任侠の  
風も減退したことは看過すべからざる事である。明治四年の頃日光縣の  
抽象的の議論より治された痛快の事蹟を述べやう。明治四年の頃日光縣の  
もった時後年文部大臣となつた久保田讓氏が日光縣の大参事として本町  
に出張し疏水のため用水堀を作る事を企図したところが或一人の男が自  
己所有地内を通過する工事を拒んで百方説諭を加へても肯かない其処を  
通過せぬと用水堀が役に立たぬ茲に於て久保田氏は一大決心を固めて  
堀を作る決行の日に至り賦役のものに於て行つて見ると朝霧の中に大  
の男が仰向に大の字になつて寝てゐる曰く此処を掘るなら己を殺してか  
ら堀れと一丈保田氏は微笑を含まれ共の後の人夫を顧みて已の後から直ぐ  
堀れと一丈保田氏は竹の杖を差して片端から大地を踏み始め人夫が直ぐ  
鉄男は急に起ち上つてにげ出したは滑稽だが今の人夫は及ぶ暇間彼の杖の  
字男は有りや否や其頃か縣令様に差出す願書中のむづかしい漢字に振り  
る膽力有りや否や其頃か縣令様に差出す願書中のむづかしい漢字に振り  
假名して投獄された儒者も近村に在る時代た今も其の堀は此の怪奇の事  
を記念するため久保田氏の名を冠した田舎の人が木訥を失へば浮華輕  
んだ旧の正月や好む者には勤勉者の有らう答はない昔の人は能く遊  
當時の社会の風習怪瀆状態が之を容るる余裕を持つて居たことも勿論で





御祝儀  
御祝儀當日となれば家の内外共に清浄にし特に式場となる

結納返礼形式は帯代が袴代となり金額は半額を通例とす。

|     |    |     |     |     |
|-----|----|-----|-----|-----|
| 年月日 | 住所 | 姓名  | 御祝儀 | 御祝儀 |
| 〇〇〇 | 殿  | 〇〇〇 | 〇〇〇 | 〇〇〇 |

2. 婚姻  
女子の婚姻嫁入する時明治維新前後迄は首字帯刀を許す水た処主級のものは駕護と用いたものである明治の中期は乗り懸け馬と稱し馬の頭に鈴を吊し尻の左右に樂敷の半鐘形の鈴を懸けて天保型の額に似たるものを馬の面上程善き所まで蔽ひ三枚靨ねの美麗なる坐蒲團を重ねる網繰る男も美々しき装ひ鞍上には今日を晴れと善美をつくせる嫁御手を乗せ馬の歩を運ぶ毎に鈴の音涙え羞恥を帯べる鞍上の佳人と映り榮えて行途の人々の耳目を聳立たしめたものである仕度調度類は馬又は車にて送られ持参金の多きを誇るの風があつた人力車の出来てからは之により目下は自動車を使ひする。

(四) 媒介者(婿)の家に至り承諾の約束をする。

吉日を選び互に結納の取替をなす(婿)をもらふ方より一族隣家の立合の上結納目録を媒介者の手を経り(婿)方に贈る(婿)方に於ても一族隣家の立合の上受取書をしたため(婿)方に媒介者の手を経り送る。この返礼は祝儀の時持参する家もある。

の初期まで続いた。





3 葬儀  
 葬儀は四葬の中土葬最も多く近未火葬するもの漸く多きを加へつつある  
 佛葬神葬天理教葬等ありて各其の儀式を異にする  
 佛葬神葬にありては菩提寺の住職を導師に招じ埋棺式を執行する  
 神葬にありては神主を招き天理教葬にありては教師を招き埋棺式  
 を執行する  
 各葬祭とも死亡者ある時は家により区内又は組合に洩れなく通知し該  
 家に集合し各其の役割を定む役割は組合相談の上取りきむ床堀棺造り  
 飛脚脚帳場接待等なり  
 (イ) 式順  
 納棺式：告別式：埋葬式 造別式の終りに焼香又は玉串を捧ぐ  
 (ロ) 會葬者は親戚縁者日頃親交ある者で多くの場合該家より通知を受く  
 るものなり死亡者に因故の深き者は弔旗花輪等を贈る  
 (ハ) 祭：此の祭は死者を祭るの謂である古未法式あり供養に對し引物と  
 稱する贈物をなす場合は離殺生戒の意味で其の資産に依り砂糖茶太  
 物等醒くないものを選びて返し神葬祭では海川の贈物を用ひる前者  
 は柩を用ひる後者は柩を用ひる其も面白い對照である本町に於ては先

べき座敷は裝飾に注意す。  
 婿入……當日婿は媒介者並に伯父母或は一族の者計五人が七人と共  
 に嫁の家に行き祝善につき近親縁者と近づきなす又組合近所廻り  
 をする初合上婿のせめ場合あり婿取の場合嫁入となる  
 門先の祝……嫁の行列が門先に着いた時二名の者定紋付の提灯に  
 てこれを出迎へ入口に十文字のタイムツを置き嫁に之をまたがせて  
 座敷へ通す  
 おてつき餅……嫁の一行着座すればお茶におてつき餅を出すこれ  
 は梳の小切の餅二個づつ汁粉の中に入る  
 三三九度……この時高砂を譲ふと例とするれども暑す場合あり  
 親子親族の近づき……互に姓名を書きたる紙を交換して近づきを存  
 す  
 親子の盃親族の盃……近づきが終れば親子親族の盃をなす  
 招待者……親類縁者承知  
 祝宴……資産に其他に関係あれど祝宴は一般に盛大で酒肴珍味を以  
 て飲を盡し其上鄭重なる祝品を呈す  
 五段のそば……祝宴の終りに五段のそばといふてそばをふるまふ  
 嫁見せ……近所縁者に案内されて近所組合を訪問し挨拶をする名  
 刺代りに手拭を呈す  
 三日の祝……祝儀より三日目にぼたもちを食べて祝ふ三つ目のぼた







年町是項目を制定した中に冠婚葬祭に關する規程があり町基本金として其の典儀を挙げる場合一人當りの費用を寄附することになり現に実行しつゝあり

(二) 追悼  
佛式 初七日。三十五日。四十九日。百日。

此の日に生前親しき人々相集りて香花を手向けて供養をなす。遠忌は一周忌三年忌七年忌十三年忌三十三年忌とし在家にありて三十三年忌に杉の頭に青葉を附けたる卒都婆を建て之を年忌の終りとす。開山忌などの何百年忌何千年忌と云ふ類は其の宗派に屬する寺院に於て執行することおれども之は自づから別問題に屬する。

神式 十日祭。五十日祭。百日祭  
此の日に生前親しき人々相集りて水花を手向け礼拝をなす。遠祭は一年祭五年祭十年祭二十年祭五十年祭  
各この日には親類縁者を始め生前親しき人々を招き重祭を行ふ

4. 入営祝  
入営期日迫れば町並に軍人分會主催となり入退兵の送迎會を開き入営退營を祝す。入営者は出營後日前より親類縁者及近所組合其他親交ありし者と訪向し入営の挨拶をなす。出營の前日に至れば縁者及近所組合其の申合せせるも種々な名分のもとに行はれず。入営當日は氏神及最寄の神社参拝出營送者け町環まで身送り町軍人分會其他團體代表者の送辭を以て別れるを例とす。

5. 七夜の祝  
出生日より七日目に七夜といひ祝をなす。當日赤子は晴衣を着産婆に抱かれ大神宮様氏神様最寄の神社に参拝す。又橋の渡初をする。赤子のひたいに犬といふ字を書き便所に至り麻がら棒にて大便を食はせるまわをする。これは昔赤子がきつねにいたづらされるので犬になれば其のいたづらさまめめるとの迷信より今に至るものこととするなり。此の日は親類(親の里方)及近所の子供を招き赤飯の馳走をなす。饅頭或は菓子等を引く家もある。又煎豆煎茶を作り神に供へ子供にも與ふ。赤産見舞を受けし家には赤飯饅頭又は風呂敷を引く。子供にも與ふ。近所組合に産産ある時は赤飯饅頭又は風呂敷を引く。白米金錢其他適當なる祝品を贈るを例とす。

6. 七十七の祝  
七十七才になれば吹竹を作り近所親交ある家に贈る。この吹竹を借用すれば火災をまぬかるといふ。贈られた家には相當な祝儀を包む。































五  
俚言

| 俚言                                      | 標準語                               |
|---|-----------------------------------|
| アノ部<br>アノナエ<br>アスンビヤ<br>アエ              | あのね<br>遊ばませう<br>はい                |
| イノ部<br>イノビヤ<br>イガネエカ<br>イガツセイ<br>インテンビヤ | 行かう<br>行きませんか<br>行きなさい<br>行って見ませう |
| ウノ部<br>ウスギビロリ<br>ウン                     | うすきみわるい<br>はい                     |
| エノ部<br>エノカイ<br>オノ部<br>オノサツセイ<br>オモシレイナ  | えいですか<br>下しなさい<br>面白いですね          |

| 俚言   | 標準語   |
|--|---|
| オサムゴザンス<br>オセロヤ<br>オキビヤ<br>カセ<br>カネーカ<br>カービヤ<br>カリテンビヤ<br>カサネエカ | おまじごじま<br>教へて下さい<br>起させませう<br>借して下さい<br>買ひませんか<br>買ひませう<br>借りて行かう<br>貸しませんか |
| キノ部<br>キチロ<br>キチワセ<br>キタンビヤ<br>キテンビヤ<br>キカネヅ<br>キータカ             | 来て見なさい<br>来なさい<br>来ただらう<br>きて見ませう<br>きませんか<br>ききましたか                        |

| 俚言  | 標準語  |
|---|--|
| クンロヤ<br>クンド<br>クンギヤネー<br>クンビヤ<br>クレナイ<br>クッチメー<br>クツテンビヤ<br>クツチミロ<br>クツチヤツタ<br>クンビヤ | 下さいな<br>下さい<br>来てはげない<br>食ひませう<br>暗いですね<br>食べてしまへ<br>食って行きませう<br>食って見なさい<br>食べてしまった<br>食ひませう |
| ケノ部<br>ケツトバス<br>ケーンビヤ<br>ケツトバス<br>ケツトバス<br>ケツトバス                                    | ける<br>帰らう<br>けるよ<br>けりませう  |
| コノ部<br>コネカ  | 来ないか   |

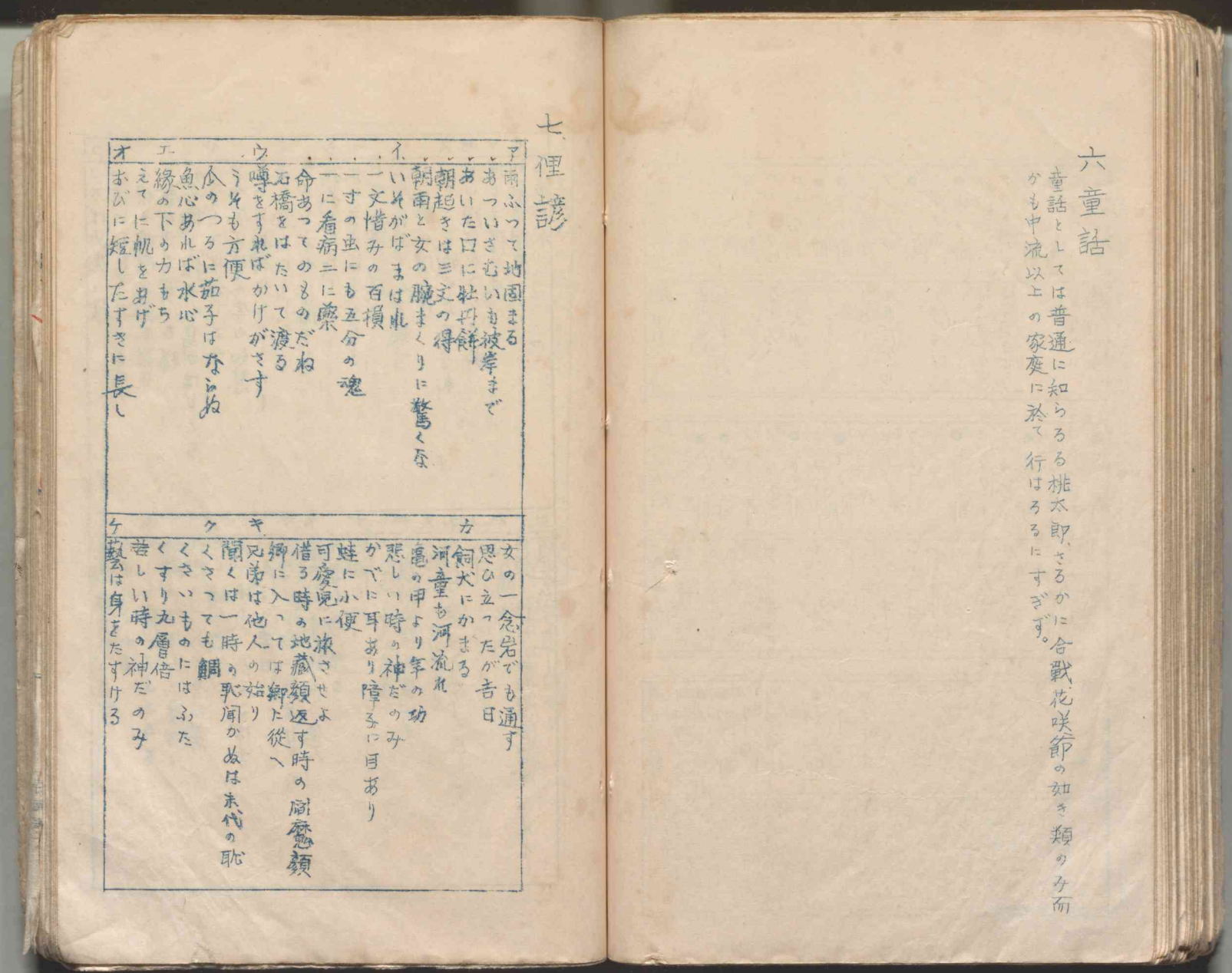
口  
い一つとはなしにその家の目標となる家紋となつたのである明治維新  
に一般に紋章自由に選定されるに至つた  
紋章の歴史  
公卿の紋章は武家より早く起つたものであるが其の発達はかへつて  
武家より後れた徳川時代になつて大名旗本等は禮服として社祓を用  
ひ、東に三つ或は五つの場所を定め家紋を据へこれから紋章の形  
が大槪左右均等のものに工夫されるやうになり従つて紋章に丸とか  
四角とか輪廓を附けることが一般に行はれ始めた。此は紋章の形  
上に大きな進歩を與へたのである徳川時代にはまた世々中大平に  
なれ奢侈に傾いてからは衣服は殊に華美となつて文章は名字の目標  
とか威儀を整へるためといふよりも裝飾として用ひられるやうにな  
り今まで用ひて来た紋章をやめて新に優美な紋章を作つて之に代へ  
たり或は今までの名縮をやめてもつと優雅な名で呼んだりする様  
なつた。この流行をねらつていろ／＼風変わりな紋章をあたつた。洋  
どがたぐさん出陣されだん／＼新らしい今迄にない妙な紋章が増加  
して来た。そして遂に面子の様なおもちや菓子や菓子のやうな食品にま  
いで紋章がつかはれるやうになつた。明治時代になり紋章はますます  
いめな運命に迫られ泰西の風俗が模倣されるやうになつた結果洋  
服の流行となり紋章は通常禮服である白襟黒紋付、定紋提灯土蔵など  
に所在を示す様になつた。











七 裡 諺

ア 雨ふつて地固まる  
 オ あついでさむいも被岸まで  
 朝起きは三文の得  
 朝雨と女の腕まくりに驚く屋  
 イ いしがはまはれ  
 一文惜みの百損  
 一寸の虫にも五分の魂  
 一に看病ニに薬  
 命あつてのものだね  
 石橋をはたいて渡る  
 ウ 噂をすればかけがさす  
 エ 瓜のつるに茄子はなぬ  
 魚心あれば水心  
 縁の下り力もち  
 オ へまに短したすきに長し

ケ 数は身をたすける  
 ク くらいたもにはふた  
 キ 聞くと一時の鯛  
 鯛は他人の始り  
 兄弟は一時の鯛  
 鯛聞かぬは未代の恥  
 可憐児に旅させよ  
 借る時の地藏顔返す時の厨懸顔  
 郷に入るとは郷に従へ  
 蛙に小便  
 かでに耳あり障子に目あり  
 悲しい時の神だのみ  
 意の甲より年の功  
 河童も河流れ  
 思ひ立つたが吉日  
 女の一念岩でも通す  
 方 飼犬にかまる

六 童 話

童話としては普通には知らるる桃太郎即ちさるかに合戦花咲節の如き類のみ而  
 かも中流以上の家庭に於て行はるるにすぎず。











八 娛樂並に趣味

種類  
大弓 圍碁 將棋 擊子 淨瑠璃 吹簫 盆裁 庭園 地芝居  
讀書 書道 百人首 庭球 競技 金踊

起原  
イ弓道 大正の末年大いに流行し各所に矢場が設けられしも近年衰微  
を存す。  
口圍碁 借より行はれしも一般的にならず一部者の間に行はる  
ハ將棋 借より行はれ老人中老間に盛んに行はれ青年も事日などにな  
し樂しむ  
ニ擊子 明治初期には中年青年間に盛んに行はれしも現時衰微せり。  
ホ淨瑠璃 明治時けいこする者が多かつたが近時少くなつた。  
へ吹簫 吹野 日渡路 菅沼大栗 出口 等におり 吹方等多少相違  
あり大栗菅沼の屋台 吹は明治十五年頃天皇様へ衆礼を賑かにする為  
め西大栗村上澤勝平氏を招き土地の青年が習得し現今に傳習せり。  
ト盆裁 泉月盆裁大正初年頃より始まり盛んに栽培せられ栽培せざる  
家なしといふて可なり。

イ庭園 近時種々の草木を植て樂む者多し  
リ地芝居 近時稽古するものなし  
又讀書 近時新聞雜誌書物等讀む者漸次増加しつあり  
ル書道 吹野 栗野 栗野 青年 昭和初年頃より墨地会 高崎道会に  
入會書道研究をなす  
オ百人首 大正初年頃より青年男女間に行はれ正月の娛樂として盛な  
リ。  
ウ庭球 青年間に行はる。  
カ競技 現時盛になり夏の夜など校庭に集り幅跳高とび砲丸投等なし  
樂む。  
コ金踊 よほど昔より行はれたわしい以前は今様の樽と設けず酒た  
るをかこんで踊りたるも今は樽を設け青年男女老幼に至るまで賑  
或は踊る お盆前後に行はる。  
ク木造り節  
シ獅子舞と歌謡 これには娛樂の部に入るべき性質のものでないかも知  
れぬが五月に特種の獅子舞と歌謡とがあり神前にて古典的に曲を奏  
する。







四 正月門松二月初午三月節句四月はお釋迦で五月は鯉のぼり六月天  
 王七月七夕八月八朔九月菊日十月又びすつこてよばれていっただら  
 ぐぢや〜にしめで一ぱいしましよ。

五 ひと目におぬづる杖に笠巡礼姿も父母をたづのうかいな。  
 ふたらがあきせうにくま水見なきまんお山でお手たたくみぶかうが  
 みるよりお弓は立上りなんのしるやとこころざししんじようかいな。  
 ようこそ巡礼まへりやせさだめしおつるはおやどうみよかいな。  
 いええおはひとりのたび父さん母さん頼しらすあひたいわいな。  
 むりにむすんだこの金を少々ばかりの巡礼にわたさうかいな。  
 なん子をだいたりせわしたりお弓のたもとほ涙みしほらうかいな。  
 山坂越えて谷越えてせつかんこまで来た娘がへそうかいな。  
 九つなる子の手をひいて十郎兵衛やかたの門の松はいらうかいな。  
 あはの徳島十郎兵衛我子としらずに手をかけて殺さうかいな。  
 一ちくおが悪かつたかんに入してく水あみださまおがもうかいな。  
 逃げて行くのは大どろぼう後から行くのは巡査様しほわうかいな。  
 三千世界は廣げれど吾れ程因果な者はないかなしいわいな。  
 死んで花が咲くものか時節の来るまでまたしやんせぶさかりな。  
 十五六の小娘がおゆづるしよつて父母ちづねおはれじやないわいな。

三 民謡  
 イお手玉歌  
 一 新とく丸は可愛相にまま母様に祈られてふた親さまがあるなりは  
 こふいふお前もしるしまい三つの年から母様に別れて行くのもつ  
 らいものよその人さへ可愛めに涙を流すもむりはないいつまで  
 うしてをられよか早く殺して下さんせ無利に願ってひまもらひ四  
 国九州さんかいに涙ながらも新とくは父さんさらばといとまごひ  
 山にねよか野にねよか狼獅子にくはれよか子ほど可愛いはまごひ  
 ひとつもの国までたづねよか十にもなつたら新とくは元の母へと引  
 きとられ

二 麻のほのねんねこしよ おんぶしなよだつこしなよからかみびよ  
 うぶでねんこしなよ 銀三郎銀ざいはたまた箱で一ちよかしたよ。

三 いちれつ談判はれつして日露戦争の戦にさんさんまけるは露西  
 の兵死ぬまでつくすは日本の兵五万の兵をひきつれて六人残し  
 皆殺し七月八日が来たなればハルビンまでも攻入てクロバトキン  
 の首をとりとうとう講和となりました天皇陛下ばんばんざい皇后  
 陛下ばんばんざい帝國一致ばんばんざい。







口 まりつき歌  
 一向不通るは生徒やないか六つの歳から學校へあがり砂をやく夏  
 雪ふる冬も雨の降る日も雪降る日にもついで一日逢参をせむに精  
 を出したるりはつな娘いつの試験も皆よく出来ていまいや生徒の  
 第一番よそれといふのも常平生に人の言ふことよくききあけて父  
 と母との教を守り外にちうどのさとしをうけて習ひ覚えし修身行  
 儀親の名までも世間ではめるほんの孝行娘めがやあやかりな

一向通るは源太じやないかお鉄砲がついできじぶちまへりきじは  
 けんけんなくばかり鳩はポポとよふたすばかり一の段上つて二の  
 段上つて三の段上つて東を見ればよい子が三人通る一に  
 よい子が系屋の娘二によい子が肉屋の娘三によい子が酒屋の娘酒  
 屋の娘はだましやじやないか紺の股引白地めたすさまじまづ一が  
 んがいましたかしました

三 うちがんにんじんさんしようしい茸ごぼう麥なつとやま芋きうり  
 とうが今市日光猿澤 シンバリーヤ ゴたんじよ ロンドン長崎 箱根  
 栗山 東京 終り

四 油とりとりおはぐろついでおめし三ばい汁五はいそれはいやなら

五 正月とや障子あければ可歳がつつみの音やら歌の声  
 二月とや日日毎日参り明日は彼岸の中日よ  
 三月とや桜花よりおひなさまがどつて見事な内裏様  
 四月とや死んで又来るお釋迦様竹の子びしやくでめすぎ花  
 五月とやごんごんはやりの前掛をお正月しめよとどいた  
 六月とやろくに田の草取らないで前掛ほしとお腹立ち  
 七月とや質屋の番頭さんに金かりてあけたりたりつちめた  
 八月とや蜂にさされて泣てぬるそこにお薬あるまいか  
 九月とや草の中には菊があるそれを子供がとるまいか  
 十月とや重箱抱えたとはいいくお師匠さんへ使に参ります

出て御産れどこからどどこまで送りませうお宮くずして松立てて  
 松の後けん立ってけんけん鳴く鳥何鳥だおらがあせどのせのす  
 けの馬鹿野郎いどにわかれてかるたにまけてもうし姉様金かすま  
 いか一兩二兩なら貸してもやるがとて三兩とはかすことは出来  
 ぬおめがみことは方のみことお仙どこへ行くとつまの山へ薩摩山  
 から谷ぞ見れば小さい子供墓石を捨て砂でみがいやすり  
 かけて紙に包んでおこやいなげりやおこやじようやは金どと思つ  
 て銭だと思つてひろげて見たれば砂でみがい砂小石砂小石まづ  
 まづ一かんかしました







六 どのんぶりの水汲み女子は蛇に命をとられた其の蛇はとこの  
 蛇にからたりあり山の青木將木にからまりやなぎにからまりつばき小  
 枝にからまりありあのおらまりちようど一貫かしました

七 向ふ横町のお稲荷さんでござつとおがんでお腰をかけたかりた所へ  
 しび茶を出してしび茶よくよくよこ目で見れば土のだんごか米の  
 だんごかまづまづ一貫かしました

八 とんとんととまきまどちござるほんたくじろしに帯買に帯もよいが  
 地もよいがしめて見たらばちよなちよなとたんで見たらばふく  
 ふくとたんすのすまつこに置いたらばあねごにとりおぼらた  
 ちえんなにおぼらがたつならげ金やの金でもあげましよかそ水で  
 いやならおよめに行く時筆筒長持買つてやる

九 あたすべわたすべどなたに渡すべ白かで黒かでどじようのすくひ  
 でだれさんにわたすべ

十 おらがあせどに乞食ばねわてる何だいてねてる石つこだいてねて  
 るあぢないこぶないこぶだらけこぶだらけ

十一 ずめずめずめどい行く今晚町へ行つたればたわらが三石泣々來  
 て牛のつちやでんがいら馬のつちやでんがいらでんがいらがいら  
 とたれば絹の着物よごした洗る川で洗つてしほり川でしほりお  
 もてへほせば入が見る裏へほせば照らねてんねてん箱の中  
 へしまひこんで置いたればねづみかちよろいいたちがちよろ  
 となりのおばさん猫一匹かしておくれ障子のかげでにやま

ハ 繩跳歌  
 一のんきな父さんお入りりやんけんぼんまけたらさつさとお逃げな  
 さい  
 二のぶしのぶしのぶのかげで大波渡れ小波渡れ波のかげでしほ切つ  
 てみせるぞ一ツニツ三ツ四ツ五ツ六ツ七ツ八ツ九ツ十  
 三郵便やさんお入りり今日はどやんけんぼんまけたらさつさとお逃げ  
 なさい  
 四のん気な父さんおばいりとなりの父さん出てちようだい







六 守歌  
 一 ぼうやはよい子だねんわしな おれ見よ昨日柳今ねむつた  
 かあからすやちうく雀め一しよにねむらうとんで行く おむ  
 水はたのしい夢のその金銀さんごの花が咲く此處にはきれいな鳥  
 もめて明日の朝迄鳴てるるぼうやもよい子だ早やねむれ御日柳目  
 だめの明日まで

二 たいよい横はままる焼だおじよろがはだかて車輓く車を輓いて金  
 ためてがまぐち拾ってよろこんだ電車光でよく見たら電車に  
 がれたちき蛙

三 よいよい横根の白兔なくと長持しよあせるぞ笑ふとわらじきはか  
 せるやねんくねんこよねんねしなぼうやはよい子だねんねしな  
 四 ねんねこくねんねこよ可愛ぼうやはいつできた どうりでお顔  
 が様色

五 ねんくころりよおころりよぼうやはよい子だねんねしな泣くと  
 なかもちしよはせるぞ笑ふとわらじをはかせるぞ

六 ぼうやが大きくなつたならあうぢでしたてし馬に乗り海山越えて  
 里越えてたまのあられもがいりみづぬの林を切たさしお馬の力で  
 てがらして金鶏動章胸にかけ節やとばあやにみせたいな

七 ねんねんころりよおころりよぼうやはよい子だねんねしな泣くと  
 はちめがちくとさすねんねんころりよおころりよぼうやはよい子  
 だねんねしなよくわりや極樂はちまんど

ホ 遊戯  
 一 セツセツ 一番始めは守都宮二に日光中禪寺三には様宗五郎四  
 には信濃の善光寺五つは出雲の大社六つ村々鎮守様七つは成田の  
 不動様八つ山中御地藏さん九つ高野の弘法師十で東京大勝利  
 ニ かつさびかつさび柿の木二月お山の合戦場銀羽織くお尚さん  
 がきたならびやんけんぽん

三 此處はどこの細道だ天神様の細道だどうか通して下さんせ御用の  
 ない者通しません此の子の七つお祈におれをおさめに参ります  
 いきはよいくかへりはよいこはよいながらも帰りのお土産何に。







九信仰 信仰の程度及状態

太古から信仰の對象は主として天神地祇であつた其の証據には到る処に  
 社殿と云ふものが建てられてある現存のものもあれば榮滅したるものもあ  
 る山中などに石の祠を隨處に見受ける此の實から考へても如何に惟神道  
 が深く人の腦裡に刻み附けられたことがわかる申比此の神と對する觀念  
 の上に變化を来したるは佛敎渡來後八宗の中にも眞言宗が天下を風  
 靡するに至り行基菩薩や空海などが本地垂迹の説を創造大成してから神道  
 に佛敎敎理を取り入れて從來の神道とは一寸趣の異つたものが出来上つ  
 た本町には眞言宗が三ヶ寺(寺は禪寺と云ふ)禪宗一ヶ寺がある眞言密敎  
 の秘奥の敎理——勿論大乗極地の秘鍵が一般の人にわかつては行かないが  
 其の神秘的怪奇な所が當時の人心に投合したのであるとして神社の別當  
 が寺院で神社は寺院と神職とが管理して居る新宮山口粟野神社に於ける  
 光明寺別當の如きも其の一例である又禪宗の脱俗的な赤洒々淨觀とを教  
 へる敎理が比較的寡慾な其の時代の人々に歓迎されたことも事實である  
 信者には主に指圖階級に属したことも注意すべきである誠に本町を中心と  
 して四隣に於ける各宗の分布状態を考へる時右の開基開祖と云ふものの  
 偉なるものがあかる本町の習俗祖先を祭り佛壇を莊嚴にし同時に神棚を  
 備へざるものは一戸もなく淨土眞宗の如く神棚を排斥せぬ所に眞言  
 宗の弘道方法の巧妙さが窺はれる信仰の濃淡より云へば古が最も熱烈で

四、ぼうちやんぼうちやんどこゆくの私の田圃へ縮刈に私の子供つれ  
 てきなお前等行くといやまになるじやまぢやけんのやつこそん

4. ラダオ  
 二十二台

5. 蓄音機  
 四十一台







十 迷 信

時代を怪るに從つて漸く低下の跡を見るが全然無信仰に歸することは如何に人心がすさんで物質的に傾いても到底有り得べきことではないと断ずるものである本町に現在存する石塔の中で十九夜塔(如意輪観音)及び地藏尊の石像が最も多くあるが是等は皆徳川中期以後のものが多いと見ると徳川家の政策が寺院を優遇したるは勿論士分は粘り置き農工商の生活が安泰で其の余徳が信仰心を越し此等の佛像佛体に注がれたかたわかに信心は徳の余りとは確に一面の眞理を道破して居る其の寺院の建築の豪華なことも這般の消息を物語るものである即ち身成佛女人濟度を高調にした眞言宗の如何に信仰的低級の人々に其所談の高玄幽妙ならずと云ふにあらざる歓迎されたことは此の建立者が絶無にして文人の絶對多數を占めてゐることが証據立てる併し此の思想は眞言宗に限つたことではない一般に波及して居るが眞言宗關係の他に多い事は争はれない

明治維新前後までは人一代に必ず伊勢參宮を済ませぬと神罰を蒙るものと解せられた程である

天理教は旧くから信奉するもの十数名有つたが教會の形を備へて宣教師の設立されたのは大正十三年十二月で信徒数は本町に八十戸二百五十余失である

火柱が立つて倒れた方向に必ず火事があるとは昔から言ひ傳へられて居た偶然か否か實際に符合逢着することがある或者は狐狸の仕業といふ最近にも其の例がある之を狐の仕業としても彼等は先天的に之を感じ通し得て警告の意味で火柱なるものを建て之を人に見せしむるものか茲に思ひ合はるるは昔は鯨が地震を起すと信じられたこともあつた最近に至り或博士が鯨は地震を起すと信じられたこともあつた場から之を説明して成効してゐるこれを思ふと一概に迷信と科学的立入れば早計かも知れないが具體的に説明の鍵を握る迄姑らく迷信の部に入れて置く

2. 丙午生れは非常に忌む人もあるが男女共に丙午生れは却て好運との説もある

3. 七日歸り 旅行して七日目に歸ることを忌む

4. 寅の日 此の日に縁組を忌む

茶茶柱が茶碗に立つと好きことがあると非常に喜ぶ















| 四月                              |   | 三月  |   |
|---------------------------------|---|---|---|
| 日光社祭礼<br>十五日                    | 神武天皇祭<br>灌佛會<br>三日  | 離節句<br>六日   | 地神祭<br>十日   |
| 栗野日光神社祭礼<br>この日尾盤賀蘇山神社へ各坪代表者参拝す | 國旗掲揚<br>灌佛會は佛生會誕生會又は浴佛會など唱へて四月八日にお釋迦様の誕生日を祝する佛家の法會であるおしやがさまは天竺の藍毘尼園に生れたので流石は此の偉人のたんじやうである故天も大に感じてか八大龍王とて雨を司る者に命じて甘露を降らしめたそこで此の甘露を取りてしやか如来佛を洗つたとの由來で今日に至りても甘露で頭からそそぎかけます<br>各戸藤を軒下に掛ます<br>栗野日光神社祭礼 | 雛飾り白酒や草餅を供へて祝ふ女子の節句といふほどで少女達にとりては誠に楽しい日である<br>國旗掲揚<br>彼岸と云へるは佛語から来たもので普通の意味に解する事は出来ない佛家の説によると彼岸と云ふのは極樂浄土のことと春分と秋分の二季に於て極樂浄土に佛 | 麻苳き終りてから行ふ所もある<br>立春になると節分と云つて神を祭るのである是れは季節の分るる日であるから節分と唱へたので彼の八十八夜とが二百十日などは何れも此の節分より勘定するものである<br>豆まき。節分の日には大豆をいりて先づ神に供へ之を取下して家の中にまくのである此の式は昔より行はれたものであるが今日では羽織袴位で致します<br>入口にかざさふせて置き團子を作つて供へるさいかちの實を焼きて悪鬼を拂ふ<br>各戸國旗掲揚 |







| 五月  | 六月                           | 七月  | 八月   | 九月   |
|---|------------------------------|---|--|--|
| 端午<br>五月五日  | ハケツ朔日<br>八坂神社祭礼<br>夏祭<br>十五日 | 釜おた<br>七夕<br>旧一日<br>旧七日   | 八朔<br>盆市<br>盂蘭盆會<br>天王様<br>盆踊<br>旧十七日  | 菊の節句<br>彼岸<br>秋夕<br>十三夜<br>旧十三日                                  |
| 天長節<br>壬午日  | 國旗掲揚<br>五日                   | 餅を造り神様に供へる<br>餅を造り紙短冊につるして赤飯をたいて祝ふ<br>新竹に色紙短冊をつるして赤飯をたいて祝ふ<br>此の朝おむけ流しといふて水あびをする。 | 餅を造り神様に供へ食す<br>盆市と林し口栗野に盂蘭盆會に雲き迎へる丈度の品々<br>を求めろ爲に市が立ちます<br>旧十三日...十六日 祖先を祭る<br>は栗野菅沼大栗にては御輿屋台を出して新し廻る。<br>樽を作り村人集り来りて踊り楽しむ。      | 春に同じ<br>春に同じ<br>十五夜と同様な供物をし子供は藁鉄砲を作り各戸を打ち廻る十三夜のわらびつぽう大麥小麥大豆も小豆もよ |
| 五月五日は端午と唱へて詩句を祝ふの習慣は古来の遺風である殊に男子生れて最初の端午に際する時は初端午と申して一層嚴重に儀式をあげるものである<br>先づ床飾りには甲冑装束の武者人形槍長刀等の武器を飾り菖蒲を立て屋外には憎鯉の吹流等をひるがへし軒には菖蒲にもぎを添て挟み親族又は近所などへは柏餅を配り家族の間では祝宴を開くのが一般の例である<br>國旗掲揚<br>田植終りて勞を慰するため仕事を休み手傳人を招き御馳走する。 | 小豆粥を食べる                      |   | 荒日なればお事といひて仕事を休み強飯などをたき供へ平穩を祈る。<br>荒日なれば仕事を休み赤飯をたき平穩無事を祈る<br>お同い<br>土用中半の日餅うなぎ等を食し健康をはかる。<br>窓前に机を据へ先づ尾花柿栗雞頭等を瓶にさし置き野菜果物を供へ月見をなす |  |







十二月

|     |      |       |      |    |     |    |    |       |       |      |
|-----|------|-------|------|----|-----|----|----|-------|-------|------|
| 夜敬言 | 消電検査 | 消防員検査 | 大まなく | 煤掃 | 八幡様 | 冬至 | 事納 | 大正天皇祭 | 門松注連飾 | 大みそが |
| 三日  | 三日   | 三日    | 三日   | 三日 | 三日  | 三日 | 三日 | 三日    | 三日    | 三日   |

夜敬言と始める  
消防役員各戸を廻り検査す  
警言察より兵検査出張兵検査  
巻に同じ

南瓜ととって置き冬至南瓜といひ食し又柿を味噌につ  
ける年越に食す標

國旗掲揚  
みそがそばをたぐる

十月

|     |      |       |     |     |     |     |     |     |     |      |      |     |     |     |
|-----|------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|-----|-----|-----|
| 明治節 | 川びたり | 奉公の交替 | 新嘗祭 | 天祭日 | 日待  | 羽黒祭 | 地神祭 | 神嘗祭 | 庚講  | 山の神講 | 麻引上げ | 初九日 | 中九日 | 末九日 |
| 三日  | 三日   | 十五日   | 十五日 | 十五日 | 十五日 | 七日  | 十日  | 十七日 | 二十日 | 二十三日 | 二十五日 | 九日  | 十日  | 十一日 |

あたらぬ三角島つぎばあたらぬと新しながら  
菅沼境沢にあり祭祀をなす  
新鮮をつき地神に供ふ畑に入ることを忌む  
正月に同じ  
正月に同じ  
麻引き終れば麻引板を飾り御馳走を作り供へ手傳人き  
招き馳走す

國旗掲揚  
餅を造り水神様に供ふ







十二 服装の変遷……維新當時より現代まで

維新後明治の初期迄は有産階級の男物に結城紬亀綾下着に黄八丈など混  
く手堅いものが喜ばれた女物も地味を好み農家に在りては男女共手織物  
を喜ぶの風があつたが段々華美なものも好む様になり複雑な服装から簡  
單に移りつゝある昔から今も変らず愛用されるものは袴地に仙台平嘉平  
次平斜子縮緬等である維新當時の資産家の娘は呉細の帯三筋を持つて行  
くものは珍らしく斯の如き人は簞笥三重お長持五棹振袖三襲おと敷へ  
れぬ程の嫁入調度であつた近年になつて本式の振袖は少く留袖にて間に  
合はするものが多い経済的に目醒めた生活の苦しくなつた結果が恐らく  
町村も大同小異である。

十三 住宅の変遷……維新當時より現代まで

明治維新前後の建造に係る農家の構造は頗る宏大であり棟木の一抱へ二  
抱へあるのは珍しくなく棟木の太さで其の家の資産の程度を語ると言は  
れたものである競つて二階建廣大き好むの風があつた之は三代前の祖父  
さんが植付けた自分の山から伐り出して造ると三三関係もあつた屋根は  
麻穀葺である大寺院の屋根などは菅麻穀交り葺で出足六尺と云ふ厚さの  
ものがあつた頃から商店のは杉皮葺の平屋建小造りが多い近年に到り  
経済的見地から家屋の大きいは無駄だと主張するものもあり本町では  
屋上制限令と布かたの持もなくなり懐爐灰に焼くので麻穀が非常に高く屋  
換に麻穀の補給に困難な場合もあり瓦鉛板葺に改葺するものが多い殊に  
大正頃から建家は好む様になり且つ衛生思想發達と共に遂次改築が行は  
れ入口の湯殿便所は現時殆んど取拂はれたり  
口栗野は瓦鉛板葺杉皮葺が多く瓦葺之に次ぐ柏木中栗野栗野には未だ  
麻穀葺が多い。







536 栗野地区 栗野町収集文書

ア1







536 粟野地区 粟野町収集文書

ア1







第十二章 運輸 交通 及 通信  
 交通変遷史  
 (一) 河川交通  
 河川交通としては何等擧ぐべきものもない。唯大正の初期以前道路交通も不便のため木材を筏として中入栗野方面より運搬した位に過ぎぬ。栗野川及び粕尾川は古来道路交通上別段の害もなしてゐない。

(二) 車馬交通  
 徳川時代までは交通機関として殆ど擧ぐべきものがない。僅かに僧侶其の他二三の者が輪を所有して居り時々使用したにすぎず他は必要ある場合には馬に依つたのである。馬とは言へば史上に現はれてゐる驛馬とか傳馬とかいふ程のものではないと考へられる。和泉要助が人力車を發明してから十年程後即ち明治十三年村内に人力車を開業するものがあり後又自轉車が出現するに及んで漸く路上交通上に一新紀元を劃する端緒に上つたのである。明治の末期になつて馬車が現はれ、大正の末期には自動車が開通された。







4 人カ車  
 渡辺某が始めて村内に人カ車を開業してより俤と呼ばれて重宝がら  
 たので次第に開業者が増加し組合を組織した。此頃が人カ車の所有  
 約二十台程であった。後自轉車、馬車、自動車等現はるゝに及んで人  
 カ車の勢力も次第に凋落した。大正十四年三月には十台であつたが現在  
 では所収に僅かに一台を残すのみである。

B 自轉車  
 本町交通史上特筆せねばならないもので當町に始めて用ひられたやう  
 になつたのは明治三十五年頃であつた。當時は高價な爲特殊階級の者  
 のみに用ひられたが大正になつてから非常に増加した。  
 をれども大正の初年の數は百台に足らなかつたが非常な勢で増加し昭  
 和七年一月現在では五百八十五台になつてゐる。  
 輕便敏速に用ひられるので愛用されてゐる。けれども最近やゝもずると  
 台數の減少する趣がある。

C 馬車(客馬車)  
 人カ車に対して一大脅威を與へたもので栗野町には明治の末年頃現れ  
 栗野、鹿沼、栗野、栃木間を毎日一回往復した。一般向なので大層便  
 利がられた。後栗野、粕尾、口栗野、栗野間も往復した。が之又自動  
 車に壓倒せられて次第にすたれ、昭和三年を終りとして其の姿を没した。  
 D 自動車  
 本町に自動車の出来たのは大正十二年で関東自動車株式會社に依つて

栗野、鹿沼、栗野、栃木間が開通。後栗野、粕尾間が通じ、昭和にな  
 つてから口栗野、栗野が開通された。  
 貨物自動車は昭和になつてから始めて開業。此相當に利用されて居る。  
 E 其の他  
 自動自轉車等もあるがあげられる程のものがない。又栗野、口栗野間の  
 客馬車が廢されてから輕便車と稱して自轉車にて引く車が出来たが余  
 り利用されず程なくしてすたれた。

(一) 道路の興亡  
 栗野、中尾、釜座に鎮座します。加蘇山神社は古來非常に尊崇せられて遠地  
 より來り参拜する者多く殊に奥州方面よりはるゝ來て参拜する者が多  
 かつた形蹟がある。  
 之等道者は四時絶ゆることがなかつたが皆徒歩であつた。後人カ車、自轉  
 車、馬車等が通行する様になつて漸く其狭路に不便を感ずることとなり郡  
 道であつたのを大正十二年、草久、栗野線が縣道に編入せられ年々改修さ  
 れることになつた。  
 之より先粕尾村に通ずる道路も縣道に認定された(舊生、栗野線大正九年縣  
 道に)これは昔發光寺を経て足尾に通ずる近路(今の栗野、足尾線)として馬  
 車に依つて荷物を運搬し交通は相當に頻繁であつた。  
 諸車の出現するに至つて縣道となつてからしばしば改修され今日に及ん

